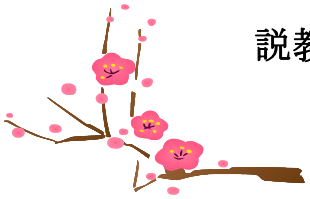


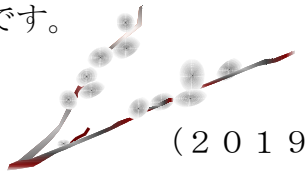
説教要旨　「平和があるように」

ルカによる福音書１０章１～１６節

イエス様はエルサレムへ、つまり十字架に向けて旅立たれました。この旅において、イエス様は、これから進んで行こうとしている村々に使いの者を出されました。イエス様は彼らを送り出すにあたって「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい」（２節）と言われています。

“収穫は多い”それは弟子たちの働きによることではありません。神様が、畑を耕して種を蒔くことから全てのことをして下さって、豊かな実りがそこにあるのです。彼らは収穫のための働き手としてそれをただ刈り入れるだけなのです。その一方で、神様が整えてくださるからすべてがうまくいく、と楽観的なことをイエス様は言っているのではありません。「それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ」（３節）と言われているように、彼らが遣わされた先で味わうであろう厳しい現実が語られています。狼の群れの中の小羊は、自分ではどうすることもできません。自分の力ではどうにもならない状況の中へと派遣されるのです。「財布も袋も履物も持って行くな」（４節）もこのつながりの中にあります。これは、自分の力に頼ることをやめてただ神様に委ねよと言うのです。そうすれば万事うまくいくと言っておられるのではありません。イエス様は弟子たちを派遣するにあたって、『あなた方が遣わされた先で起こる結果、それが成功であれ失敗であれ、その結果の責任をすべてわたしが負うから恐れず歩みなさい』と伝えておられるのです。

ですから私たちは失敗を恐れることなく、送り出されたその場所で『シャローム＝平和があるように』と挨拶をして、イエス様が来られることを、救いの到来を告げることが出来ます。無責任に聞こえるかもしれませんが、その家に平和が訪れるかどうか…それは、わたしたちが判断することではないのです。拒む人に対しては、その人が神の国が近づいたことに気づくことができるようにと祈りつつ、主にすべてを任せて、『シャローム＝平和があるように』と、次の家の戸をたたくのです。



（２０１９・３・２４　説教者：稲垣真実）